

■IBBY 国際子どもの本の日「子どもの本フェスティバル 2010」■

## 『ブックバード日本版』創刊記念イベント

『ナショナル ジオグラフィック日本版』藤田宏之編集長 &  
『ブックバード日本版』百々佑利子編集長のライブトーク

# 本×世界×環境＝子どもの未来をつくる

日時●2010年3月20日(ゲートシティ大崎 東京都品川区)

主催●JBBY、JPIC(出版文化産業振興財団)、文字・活字文化推進機構

2010年3月20日、「子どもの本フェスティバル 2010」会場で『ブックバード日本版』創刊記念イベント『『ナショナル ジオグラフィック日本版』&『ブックバード日本版』編集長ライブトーク』を開催しました。

複雑化する社会の中で、国際理解の重要性や環境への意識など、それぞれの立場から「子どもたちの未来」と雑誌の役割りについての対談が行われました。



**百々編集長:** 本日は『ブックバード日本版』の創刊記念イベントにお越しいただきまして、ありがとうございました。『ナショナル ジオグラフィック日本版』は今年4月で15年目を迎える翻訳誌の大先輩のお話がお伺いできるということで、ありがたいことだと思います。

私は、この表紙の黄色いフレームが目印の雑誌はまだ日本版が発行される以前から存じ上げておりまして、本当に大好きな本です。読者としても、今日は藤田さんの雑誌のお話を本当に楽しみにして参りました。

**藤田編集長:** こちらこそ、お招きいただき、ありがとうございます。また、『ブックバード』も日本版が多言語の第1号ということで、これからが楽しみです。実は『ナショナル ジオグラフィック日本版』も多言語版の1号です。1975年の4月に創刊し、その後32言語の版ができ、180カ国で約920万人が購読しています。

『ナショナル ジオグラフィック』のキーワードは「世界の森羅万象」。これは、電話を発明したグラハム・ベルが理事長だった時代に残した「取材対象は森羅万象だ」という言葉が由来です。森羅万象ということは何でもありということで、言い換えれば何の切り口もないので、私たち編集者は困るのですが。(笑) その後、自然、動物、文化、歴史、科学などを主体に追いかけてきたのが『ナショナル ジオグラフィック』の120年の歴史です。

**百々編集長:** 本当に素晴らしい歴史ですね。そして、世界中にそれだけの読者がいらっしやるということは雑誌としての責任も大きいでしょうし…。毎号日本版を発行するにあたって、いろいろご苦労するところも多いのではないですか？

**藤田編集長:**本当にいろいろとありますね。(笑) 翻訳については、読者から毎号何らかの問い合わせが入ります。厳しい意見も含めて。それは翻訳雑誌の宿命ですね。日本版の編集としての苦勞は、雑誌の作り方です。『ナショナル ジオグラフィック』は日本の雑誌の作り方と根本的に違っていて、デザインや写真が重要なのです。日本の場合、企画があつて、取材をするライターがいて、内容をテキストで伝えるというテキスト・ジャーナリズムが主体となります。その場合、写真はテキストの内容を伝えるものとして使用されるのですが、『ナショナル ジオグラフィック』は写真ありきで、良い写真が撮れなくて、特集が落ちるといったようなことも毎年あるのです。日本版独自の企画をたてる時も、写真がうまく撮れていないとアメリカのナショナル ジオグラフィック協会本部のデザイナーの許可がおりず、「その企画はやめてしまえ」と言われたりして、なかなか企画が通りません。ですから、毎月のように意見を戦わせています。読者からも「私たちはアメリカの雑誌が好きだし、アメリカの雑誌を読みたいので、そのまま翻訳してくれるだけで良い」という声もあります。もちろん日本独自の記事を支持される方もいらっしゃるので、読者の意見に日々耳を傾けながら制作しています。

**百々編集長:**先ほど控え室でチラッと伺ったのですが、これまでに『ナショナル ジオグラフィック』はいくつか大スクープがあつたとか。

**藤田編集長:**有名なのが、インカ帝国の空中都市ペルーのマチュピチュです。これは20世紀の初めに「ナショナル ジオグラフィック研究プロジェクト」で発見され、『ナショナル ジオグラフィック』に世界で初めて写真が掲載されました。80年代には沈没したタイタニック号の海中探査を『ナショナル ジオグラフィック』が主導で調査し、これも雑誌では初めて写真を紹介したという実績があります。最近では『ナショナル ジオグラフィック』の顧問をされているエジプト考古最高評議会のザヒ・ハワス事務局長が、ツタンカーメンの死因がDNAの調査結果でマラリアだったという事を雑誌で発表しました。ツタンカーメンは体が弱かつたのですね。これは『ナショナル ジオグラフィック』だけの発表ではないのですが、このように、新しい発見を雑誌で初めて紹介することを続けています。

**百々編集長:**たくさんの専門家も雑誌の発売を待っているでしょうし、一般の読者にも刺激的な記事が、いっぱいあるわけですね。先程、企画など「ナショナル ジオグラフィック協会」の本部ともやり合うとおっしゃっていましたが、各国の編集者が一堂に集まる時はあるのですか？

**藤田編集長:**おおよそ年1回、アメリカ・ワシントンで各国の編集長が集まって話をするという機会があります。そこでは、国は違っても編集長の考えていることは大体同じなんだなと思います。簡単に言えば、読者になるべく安い値段で良い情報を提供することです。そのためにどういふ手法があるのかという事でお互いに知恵を出し合うので

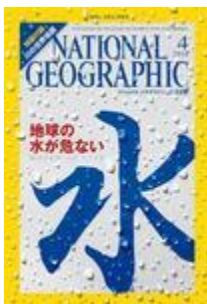
すが、この時は言葉がうまく通じなくても不思議と分かり合えますね。

**百々編集長:** その会議では、各国で発行したバックナンバーの反省などをされるのですか？

**藤田編集長:** 反省点も話し合いますが、実は私も含め各国の編集長はだいたい米国版の批評をします。米国版はインターナショナル誌をうたっていますが、やはりアメリカの雑誌ですから、どうしてもアメリカの読者向けと思われる非常にロマンティックな企画が増える傾向があるのです。個人的な感覚ですと、アメリカの人は「土と岩」好き。私から見ると、どうみても荒野にしか見えないような、名もない砂漠にある岩に「表情が見える」といったキャプションが写真に付くのです。これはアメリカの読者には理解できても、日本人には理解できないと感じます。グランドキャニオンぐらいの有名なものなら、日本の読者にも面白いと思っていただけたらと思うのですが…。

日本人は、湖など潤いのあるものの表情を読み取る事は得意だと思います。でも、乾いた土や岩の表情を読み取るといったことはアメリカ人のように、やはり大陸に暮らしている人でないと感じる事が出来ないものだ、という事を米国版に説明します。「これは日本の読者に伝わらない」と強く言わないと、特集が「岩」ばかりになってしまいますからね。実際はこんな風にうまく英語で話すことは出来ないのですが(笑)。各国の編集長とも、そうやってやりとりしていきます。ヨーロッパの方とも、よく話をしますね。

**百々編集長:** ここで藤田編集長が『ナショナル ジオグラフィック』の特集についてスライドを持ってきて下さったので、皆さんで拝見したいと思います。



**藤田編集長:** あまり小難しい話をしても、と思ひまして。来週発行する4月号の紹介をしたいと思います。4月号は丸ごと1冊「水」についての特別号です。全世界の『ナショナル ジオグラフィック』で刊行する企画で、860万部発行されます。

日本版には「地球の水があぶない」とタイトルをつけました。地球は水の惑星と言われているのですが、ここで皆さんに質問したいと思います。

地球にある真水、アクエリアスと言いますが、真水の量、比率は地球のどれくらいかご存知ですか？「常識だよ、知っているよ」という方もいらっしゃるかと思いますが…。僕は正直知りませんでした。(笑) 正解は全部で3%です。97%が海水で飲むことができません。普通の飲料水としては価値がないし、いろいろな用水としても使用することができない水です。そして、3%のうち2%は氷の状態です。ですから、液体の状態の真水は残りの1%です。この1%で約68億人と言われる人間の飲み水、農業用水、原子力発電所などの冷却水にいたるまでまかなっている、これが現状です。4月号では「水は限りある資源である」という事実を1冊で展開しています。

まず、ヒマラヤの水河が解け出している事についての記事からはじまります。ヒマラヤの水河が解けたすと洪水が起こり、アジア地域の20億人の生活をまかなっている水

が流れてしまう。結果的に水不足が始まります。大体 100 年くらいでヒマラヤの氷河の厚さは 100m くらい減っているそうです。特集では、同じ場所の写真で 1921 年と 2008 年の氷河を比較しています。

次はケニアの写真です。こちらは深刻な干ばつで、毎日 5 時間くらいかけてお母さんたちが子どもたちのために水を運んでいる様子です。背中に背負っているものは全部ポリタンクです。

特集の最後の方になりますが、ヨルダン川の問題について書いています。日本では、中東問題は宗教戦争とイメージされる方が多いかと思いますが、実は水の問題も大きいのです。ヨルダン川はヨルダンからシリアの間を流れていますが、ヨルダン川西岸地区の水利権を巡って、アラブ諸国とイスラエルはずっと争っています。今でも、ヨルダン川のほとりには兵隊がいて水をずっと見張っており、中東戦争の原因の1つとなっています。記事では、パレスチナ自治区で水の配給を受けるために並んでいる人々の写真。そして、ちょっと意地悪な並べ方ですが、下にイスラエルのプールで子どもたちが水遊びをしている写真を掲載しています。

最後の写真は死海です。死海もヨルダン川が水源です。ヨルダン川の水量はここ 15 年間で 10 分の 1 位まで減って、水位が 20m くらい低下しているそうです。このような特集を 4 月号で掲載しています。少し宣伝を兼ねてご紹介させていただきました。写真を通して世界の今を見ていただく、というのが私どもの雑誌ですから、実物を見ていただいたほうが分かりやすいですし…。

**百々編集長:** 大変素晴らしい写真をありがとうございました。『ナショナル ジオグラフィック』は写真と文章のノンフィクションですね。『ブックバード』は論文、エッセイなどで構成されていますが、元になっているのは児童文学です。その中にはノンフィクションも含まれています。ちょうど『ブックバード日本版』の創刊号でも中東、アラブの問題を子どもたちの文学やお話を紹介しながら特集しています。アプローチは違いますが、同じように世界の今を子どもの本を通じて伝えています。

パレスチナの子どもたちが書いた物語を読みますと、オリーブの木の下でいろんな夢を描いて希望を掲げようとしていたところ、そのオリーブの木までイスラエル軍によって根こそぎ倒されてしまった、という自分たちの苦しみや悲しみを伝えようとしています。『ナショナル ジオグラフィック』の記事にあるような、大人の水や土地を巡る戦いの果てに苦しんでいる様子、そして何に喜びや慰めを見出しているかも分かります。子どもたちには、何の力もありません。争いの原因が何であれ、すべて大人の責任だと感じます。

**藤田編集長:** 「わたしたちはまだまだ知らない」といったフレーズを『ナショナル ジオグラフィック日本版』では呼びかけています。日本人にはもっと世界の素顔を知って欲しいと思います。



**百々編集長:**世界で起こっているさまざまな問題が、日本人にも全く無関係な話ではないことを、知る必要があります。

そして、こちらのスライドにある言葉。私は全く知らなかったのですが「ゆでガエルの法則」ですか?「ゆでガエル」とは何となくユーモラスな感じを受けますが、藤田さんご説明いただけますか?

**藤田編集長:**まとめというところで書きました。「ゆでガエルの法則」は経営者の間やビジネススクール、環境問題でよく使われる言葉なんです。ご存知の方は聞き流してください。

カエルを冷たい鍋に入れて火にかけ、徐々にゆっくりと温めていくと、気がつかないままゆであがって死んでしまう。でも、いきなり熱い湯に入れるとビックリして外に飛び出るので死にません、というお話です。

このような事が起こっています。例えば環境問題。温暖化というのは、鍋の中のカエルと全く一緒に、人間の周りがどんどん、どんどん暖かくなっていきます。「暖かくなって良いじゃないか、二毛作や二期作が出来て」という話もあるようですが、気をつけておかないと急に沸騰して、その時にはもう誰も抜け出せなくなってしまうということです。そのためにはいろいろな情報を知っておくということが重要だと思います。

今、世界で起こっていることは、いずれ日本にも関係してくることで。私たちはまさに「地球の危機」ということではなく、「人類の危機」なんだということを忘れてはいけなと強く思っています。よく「地球にやさしく」とか「地球を守ろう」という言葉を使いますが、地球は優しくしてくれなんて一言も言っていませんし、多分思ってもいないと思います。46億年の歴史で何回も地球上の生物は絶滅していますので、簡単に人類くらいの生命は振り落とされていくと思います。これまでと同じことが起こるだけです。ですから、「地球にやさしく」という言い方は傲慢で、人類の方が主体的に地球と一緒に生きることを考えなければ駄目だと思います。世界中の『ナショナル ジオグラフィック』もこれに近いことを思っています。

「Inspiring people to care about the planet」これが世界中の『ナショナル ジオグラフィック』の共通標語です。「Inspiring」、すなわち「奮い立たせてあげる」というのは簡単なのですが、その意味は「agitation」の「心をかきたてる」というより、お互いに共感していくことだと思います。

実は「Inspiring people to care about the planet」を、どんな言い方で訳すかと迷い続けて、英語のまま2年くらい経ってしまいました。(笑) 世界の編集者たちとコミュニケーションするため、共通言語としての英語ではあるのですが、各国とも本当に伝えるべき対象は自国の読者ということで、この言葉を自前でどのように翻訳するのは、とても重要なこととなります。なので、翻訳は本当に難しい。『ナショナル ジオグラフィック』のテーマは「地球」ですから、世界の人々の相互理解や環境保全の取り組みなども表現できなければいけませんからね。

余談になりますが、これがなかなかビジネスには、ならないところなのです。本当に大

事なことなんですけど…。『ブックバード』も同じように、そこに挑んでいかれるので、メールを送りたいと思います。

**百々編集長:**ありがとうございます。頑張りたいと思います。

そして、『ブックバード日本版』の創刊号についての宣伝も少し、させていただきま  
す。アメリカから出たものをそのまま翻訳するという事は契約上の約束で、前から 76  
ページまで英語版の翻訳となっています。日本版のオリジナルコンテンツとしては、今  
回 JBBY の島多代会長の「ブックバードの歴史」を寄稿いただいていますし、「教育現  
場にもっと学校図書室の活用を下さい」といった藤原和博さんのインタビュー、「第 39  
回学校図書館賞」を授賞した東京都中野区立 啓明小学校の子どもたちの図書活動  
の様子、(財)大阪国際児童文学館主任専門員である土居安子さんの本の紹介など  
があります。今後も日本独自の児童文学の展開を日本の読者と、それを後ほど英語  
版に翻訳し海外の読者にも紹介していきたいと思います。ここにいらしていただいた  
皆様からも、これからいろいろなお意見やご批判をいただきたいと願っています。

ところで、藤田さんも読者から様々な意見をいただくと思いますが、どのようなもの  
ですか？

**藤田編集長:**『ナショナル ジオグラフィック』は、直接読者のもとへ雑誌が定期的に届  
く直販という販売が中心です。9 割以上は直販です。そうなりますと号の売れ行きから  
では雑誌の人気がよく分かりません。なぜなら、直販の場合は少なくとも 3 ヶ月、長くて 1  
年という購読契約なので特集や内容に関係なく、面白くなくても購読期間中は解約さ  
れません。売れ続けてしまうのです。

ですから、これは米国版でも日本版でもやっている仕組みですが、テレビの視聴率  
調査のように、私どもがスコアブックとよんでいる調査票を送って読者にご意見を書い  
ていただいています。それを記事ごとの支持率で集計し、特集のラインナップを考え  
ています。



その中で支持率以外の意見として出てくるのは、最初にも少し言いましたが、「日本  
語がなっていない」というお叱りで、毎月いただきます。また、対応が難しい意見で、  
「取り上げるテーマが違う」といったものがあります。『ナショナル ジオグラフィック』は  
世界の森羅万象がテーマ。このテーマの範囲が広すぎて、読者によっては持たれるイ  
メージに差異が生まれるのです。例えば普段、山の雑誌を好んで読まれている方は、  
山の記事がたくさん出ている雑誌だと思って定期購読していたら、実際は山の特集は  
年に 2、3 回だけで、それ以外は動物や、それこそ自然とは別のツタンカーメンなどが  
特集されています。さまざまな特集こそが『ナショナル ジオグラフィック』なのですが、  
山が好きで、または、恐竜が好きで、などの理由でたまたま購読された方は途中で  
「何かが違う」といった意見を言われます。そういった読者には、『ナショナル ジオグ  
ラフィック』らしさとは何か、を何とか伝えたいですね。



**百々編集長:** そうするとどうしても「Inspiring people to care about the planet」を日本語に訳さないといけないですね。

**藤田編集長:** そうです、そうです。(笑) アメリカは3年前に「Inspiring people to care about the planet」をスローガンに掲げました。実はそれまで「全米に地理学の普及のために」がスローガンでした。『ナショナル ジオグラフィック』は直訳すると「全米地理学会」です。ある大手新聞は未だに「全米地理学会」と書くので、「ナショナル ジオグラフィック協会」と書いて下さいと言っています。(笑)

これまで協会は100年以上「地理学の普及のために」がスローガンでしたが、21世紀に入って状況が変わってきました。それまでは地球は探究の対象で、知らないことを探検して発表すれば良かったのですが、もう地球の事も大体分かってきて人類の活動が地球に与えている影響も見えてきた。地球を調べるだけでは駄目だという事が、「Inspiring people to care about the planet」という言葉にはこもっていると思います。

**百々編集長:** 『ブックバード日本版』では、「世界は『子どもの未来』と『言葉』でつくられる」、つまり子どもの未来を言葉で語ることによって理想とする世界が作られる、と信じています。『ナショナル ジオグラフィック日本版』では子どもの未来という点をどうとらえていらっしゃるでしょうか？

**藤田編集長:** 日本版の立場で話をしますと、子ども向けの本の出版をやらないと思っています。アメリカやドイツ、フランスでは『ナショナル ジオグラフィック キッズ』という雑誌を出しています。子どもたちにサイエンスをわかりやすく、最先端の科学をわかりやすく伝えようといった本です。日本でもそのような本を出版したいのですが、残念ながら少子化傾向などからその市場性がないと、社内のマーケティング部門から許可が下りません。会社にとっては、ビジネスとしての位置づけも必要ですから。それを考えると、なかなか企画を立ち上げる事が出来ないのが現状です。

しかし、全地球的には人口爆発の中、日本だけを見ると人口が減っている、子どもが減っている、という社会の仕組みはわりと特殊だと思います。この、日本の子どもたちに何を伝えたいのかという事を考えた時、編集側には思いがあるのですが…。しかし、できる場所では「恐竜図鑑」などの翻訳書などを子ども向けに出版することを始めています。

**百々編集長:** 「子どもの未来」といっても複雑に絡み合っていますから、なかなか理想通りいかないこともありますね。『ブックバード日本版』も、「子どもたちに文学で未来を」という思いで児童文学の発展を願い、そのために発行部数を伸ばすための知恵を絞っていかなければいけません。

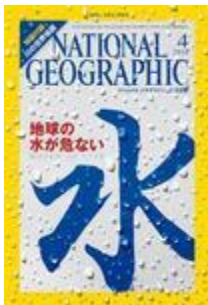
『ナショナル ジオグラフィック日本版』は「この地球を大事にしましょう」ということで、これはもちろん「子どもの未来」のためでもありますね。私たちはこの地球から逃れら

れませんし、「地球」がなければ「本」も「子どもの未来」もないわけですから。本当に、担う役割りは大変なものだと思います。創刊号を出版して1週間もたたない分際です縮小なのですが、アプローチは違っても同じ方向性を持った雑誌ということで、これからもよろしくお願いたします。

**藤田編集長:**私も『ブックバード日本版』の活躍を期待しています。頑張ってください。

**百々編集長:**15年後に、15周年を迎えた『ブックバード日本版』と30周年を迎えた『ナショナル ジオグラフィック日本版』が、また同じようにお話出来たら素晴らしいと思います。その時もまた会場の皆さんに元氣でご参加していただきたいと願っています。藤田さん本日は、本当にありがとうございました。

## <編集長プロフィール>



藤田宏之(ふじた・ひろゆき)

『ナショナル ジオグラフィック日本版』編集長。1987年に日経マグロウヒル社(現・日経 BP社)入社。『日経ベンチャー』『日経ビジネス』の編集などを経て、2007年4月から現職。『ナショナル ジオグラフィック』は米国ワシントン D.C.に本部を置く1888年設立のナショナル ジオグラフィック協会が発行し、世界約180カ国で850万人が購読する月刊誌です。自然・野生動物・社会・文化・探検・科学など、地球とそこに生きるすべての生き物の営みを、世界の一流写真家が撮りおろした美しい写真と、臨場感あふれる記事で紹介しています。

<http://nng.nikkeibp.co.jp/nng/index.shtml>



百々佑利子(もも・ゆりこ)

『ブックバード日本版』初代編集長。アメリカ、イギリス在住の経験を生かし児童文学及び伝承文学の翻訳と研究に携わり、神奈川大学(オセアニア研究)、日本女子大学児童学科(児童文学)で教鞭をとりました。また IBBY 国際理事、『ブックバード』論文審査委員なども務めていました。「児童文学を英語で読む」(岩波ジュニア新書)、訳書「クシュラの奇跡」(のら書店)、「世界のはじまり」(岩波、絵本)、「ナーサリ・ライムズ」(ラボ教育センター)、「オセアニアを知る事典」(平凡社)他著書、訳書多数。

<http://www.bookbird.jp>

\* 両誌とも、富士山マガジンサービスから、定期購読の申し込みができます。